

E・デイビス著

## 『植民地主義に挑戦して』

——ミスル銀行とエジプトの  
工業化、1920～41年——』Eric Davis, *Challenging Colonialism: Bank  
Misr and Egyptian Industrialization, 1920-  
1941*, プリンストン, Princeton University Press,  
1983年, xv+232ページ

## I

ミスル銀行はエジプトにおいて、多分アラブ世界全域においても最初の民族資本銀行であると言ってよいであろう。しかも同行は単なる商業銀行ではなくて、その最大の特徴は傘下に多数の工業会社を擁する投資銀行なのである。同行に関する研究が欧米において開拓され始めたのは比較的新しく、1970年代になってからで、M・ディーブ(注1)、R・L・ティグナー(注2)などの若干の論文が存在したけれども、本格的な学問的研究書の出現は長い間待望されて久しかった。昨年プリンストン大学から出版された本書は同行に関する最初の見事な歴史研究書であり、同行の成立、発展、破産という一連の過程に多数の一次資料を使用して分析と実証を行なったものである。このような題名から類推すると、著者の意図はミスル銀行の現在に至るまでの歴史を漫然と紹介することにあつたのではなくて、非西欧世界における民族資本による工業化の成功と失敗という約20年間に展開した経過にのみ焦点をあて、第三世界における工業化の困難な問題点を分析しようと試みた点にある。

本書の構成は以下のようになっている。

1. 序文
2. 世界市場へのエジプトの組込, 1760～1882年
3. 従属的發展の諸矛盾, 1882～1920年
4. ムハンマッド・タジアト・ハルブとナシ「ナリス」ト運動
5. 再編成される植民地主義, 1920～1930年
6. ミスル銀行と新植民地主義, 1930～1941年
7. ミスル銀行とアラブの経済発展
8. 従属的工業化の政治経済学

(注1) Deeb, Marius, "Bank Misr and the Emergence of the Local Bourgeoisie in Egypt," Elie Kedourie 編, *The Middle Eastern Economy: Studies in Economics and Economic History*, ロンドン, Frank Cass, 1976年, 69～86ページ。

(注2) Tignor, Robert L., "Bank Mişr and Foreign Capitalism," *International Journal of Middle East Studies*, 第8巻第2号, 1977年4月, 161～181ページ。

## II

著者の理論的枠組は「政治経済学に基礎を置く一層大きな理論的フレームワーク」(xiiページ)であり、「非西欧諸国における工業化過程を狭義の経済的用語によって見る理論の不十分さ」(5ページ)を認識して、ミスル銀行の一連の歴史的経過を純然たる経済的視点からではなくて、政治的、経済的、社会的背景を取入れた一層広範な枠組で理解しようとするものである。評者の理解があるいは間違っているかも知れないが、著者の立場はマルキストではないが、根本的には近代化理論に疑問を抱き、マルキシズムから影響を受けているものと考えられ、アメリカの学者のなかではやや異端に属しているものと思われる。最初、氏は理論的枠組を展開しているが、ミスル銀行史を分析しようとする場合、既存の公式的なマルキシズムや従属理論では十分な説明は不可能であると、同行史に関する政治的、経済的、社会的背景を克明に追求し、理論と事実の矛盾を指摘している。マルキストでない評者が本書を通読したときの率直な感想は氏の理論上の枠組が顕著に露出して、逆に同行およびその周辺に関する従来知られていない事実が豊富に含まれていることに驚嘆する。その点では著者の理論上の立場に神経過敏になりすぎて、氏の天賦とも言うべき豊富な実証主義まで否定し、本書を書棚の片隅に「ツン読」とすれば、エジプトの民族資本銀行による工業化に関する興味深い実験を観察せず、その教訓を汲取らずにいるという残念な破目に陥ることになりはしないのか。本書の最大の特徴は氏の理論上の枠組にあらず、「同行の背後に存在する一層大規模な社会的勢力」(xiiページ)に対する著者の丹念な調査であろう。これこそ従来不明のまま放置されてきたミスル銀行史に新たな開拓の鍬を入れたものと考えられる。評者は何よりもこの点に高い評価を与えたい。

## III

さらに、氏は本書によって次の四つの問題提起を行なっている。つまり、それは歴史的には(1)ミスル銀行成立の背後に存在する社会的勢力の性格とか、(2)なぜ1920年という時点に同行が設立されるに至ったかという経緯についてであり、さらに理論的には(3)非西欧諸国において国民の生活水準にインパクトを与えるような工業化がはたして可能なのかとか、(4)工業化の展開過程におけるナショナル・ブルジョワジーの果たす役割についてである。このような問題提起は植民地体制ないしその遺制下における「社会的勢力」、単純に言えばブルジョワジーに対する著者の関心から当然発生してくるのであって、本書の各章はそれらに対する分析であり、解答である。まず第1に、著者は(1)に関してミスル銀行の成立がタラアト・ハルブという1人の天才的企業家の努力だけで可能であったのではなくて、かれと意見を同じくし、それを受容し、積極的に参加する社会層の存在があつてはじめて可能であったと指摘している。同行の成立および発展は「人口に膾炙した神話」(xii ページ)では説明不可能であり、個人の役割には限界があるとし、ハルブ周辺に活動する大地主の社会的、経済的性格を可能なかぎり詳細に調査しているところに本書の大きな特色がある。たとえば、筆者は『ミスル銀行50年史』を使用しながら、同行の創立資本金の27%以上がミアア県出身の地主の出資によるものであり、ハルブ周辺に一種のグループ(shilla)が形成されていた(55ページ)としている。そしてそのグループの意味内容を考察しているのである。しかも、現存する関係者たちともインタビューを試みることによって、かれらの直面したさまざまな問題を確認し、解明しようと試みている点においても、本書は地域研究のすぐれたモデルである。また、同行出資者家族の土地所有規模を各地域の土地台帳に当たり、時系列的にかなり過去にまで遡って調査を実施し、これらの社会層の経済的、社会的構造を分析していることによっても、筆者のカイロ、否、エジプト滞在は豊かな結実を生んでいる。

つぎに、(2)イギリスの植民地支配がいまだ終了していない1920年という時点になぜ民族資本を標榜せるミスル銀行が成立可能であったのか、著者はその謎を「1919年革命」および「ナショナリスト運動」(196ページ)との関連において把握し、多数の預金者がミスル銀行に殺到

し、同行に支援を表明した歴史的過程のなかで理解しようとしている。と同時に、氏は経済史的にも考察を行なう。18世紀のイギリスの産業革命以来、とりわけ19世紀にエジプトは綿花栽培の急激な発展によって世界市場に組込まれる。その時点こそエジプト近代の出発点なのである。世界市場へ組込まれることによって、地主の資本蓄積が可能になり、その資本蓄積によって経済力を獲得したかれらが民族資本銀行を設立する。かれらは宗主国に対して原料供給、製品輸入を行なうこの国の経済構造を改善しようと試み、同行傘下に綿紡織業を中心とした多数の企業を創設するに至る。まさに上記のような政治的、経済的過程のなかでアラブ世界最初の民族資本銀行が設立され、発展するのである。その意味においても、外国の資本輸出による経済支配に対抗して土着の資本家が確立してくるとするレーニンの帝国主義論(6~7ページ)や、周辺(periphery)にいる国内ブルジョワジーと中心(core)にいる外国ブルジョワジーの利害の一致によって工業化が遂行されるとする単純な従属理論(8ページ)のみでは、同行の成立が不十分な理解に陥る危険性があると指摘するのである。

さらに、(3)エジプトのような非西欧諸国において国民の生活水準にインパクトを与えるような工業化がはたして可能なのか、という問題提起に対する著者の解答は本書の最後の結語のなかに与えられている。すなわち「1920年から1941年の間のエジプトにおける社会的、経済的、政治的諸条件であれば、タラアト・ハルブとかれの同僚たちが最初に描いたエジプト工業化の規模および外国の影響からのエジプト工業の独立が可能ではなかったということは明白である」(211ページ)と本書を総括し、後進的な社会経済構造を有するこの国において、後進先進国ドイツの工業化をモデルにしたミスル銀行を中心とする工業化がきわめて困難に満ちていたことが示唆されている。ただ評者は氏の言う「国民の生活水準にインパクトを与えるような工業化」がいかなる内容を正確に意味しているかを判断し得ないが、かりにそれが綿紡織業の急速な発展により工業による資本蓄積が可能となり、軽工業から重化学工業へ工業発展が行なわれたとする意味においては、確かに氏の指摘のとおりであるけれども、もし技術導入がある程度行なわれ、輸入代替が可能になったという意味では若干ニュアンスが異なってくるのではないか。同行による工業化の推進は同一時期について綿紡織業が輸入代替の可能性をもつ見通しを持たせたとし、技術の吸収も徐々に可能にさせたことも確かだ

はなかったのか。

最後に、(4)工業化の展開過程におけるナショナル・ブルジョワジーの果たす役割がいかなるものかと問う問題提起に対し、筆者の分析は以下のとおりである。ミスル銀行の手によって1920年代に設立された若干の幼稚産業は先進諸国の製品との競争上、30年代に入ると幾多の関税保護を必要とするに至る。もちろん、1930年代に新設される諸企業も当然関税保護を前提としている。そのためハルブはそれを擁護する政治家や官僚、ナショナル・ブルジョワジーと結託し、かれらを同行理事に就任させたりする。それに対して、1930年代において、ミスル銀行は傘下諸会社のなかに、ミスル保険会社、ミスル航空、ミスル精紡織、ベイダ染色会社などの外資との合弁事業を加えるが、それらを背後で推進しようとするグループとハルブらが対立する。筆者は1920年代と30年代との全然異質な局面の展開に対し、一種の連続性を持込んで、「周辺にいる国内ブルジョワジーと中心にいる外国ブルジョワジーの利害の一致」（8ページ）のなかで工業化が推進されるという従属理論の適用を拒否するのである。結局、ミスル銀行の破産によって、ハルブを主導者とするグループは退陣し、アフィフィ、シドキ、ヤヒア、やや遅れてアップードなどの自由貿易を擁護する政治家や商工業階級がミスル銀行を掌握するというのが氏の歴史認識である。以上見てきたように、ミスル銀行とその工業化の展開過程をタラアト・ハルブの個人的な意図や選択で説明するのではなく、「植民地主義」対「民族資本」の対抗関係のなかで、エジプト国内の「社会的諸勢力」の社会的、経済的葛藤を解明することによって、本書はこれまでほとんど不明のまま放置されていた20世紀エジプト経済史に新たなページを加えたと言っても間違いはない。

#### IV

ところで、時間の制約もあって、誤解や誤読があるかも知れないが、評者は若干の感想と注文をして自分の責を塞ぐこととしたい。まず第1に、同行創立者のタラアト・ハルブの個人的な意図や選択よりも、かれの周辺に位置する「社会的諸勢力」の社会的、経済的葛藤を重視する筆者の基本的枠組があるために、氏は当然調査の力点をそこに置いている。そのため、タラアト・ハルブに関する研究はある点において放棄されている。かれの社会的、経済的背景に関してはかれの父母双方の家族の土

地台帳まで精査対象にしたり、学歴、友人関係、経営知識の習得などにいたるまで周到な分析を行なっているけれども、かれ個人の思想や経済観を発表したハルブ自身の著作の理解や研究は従来一般に紹介されている水準以上に一步も出ていない。また本書には確かにかれの代表的著作が引用されているけれども、それらの内容の紹介や検討が本格的に行なわれているとは考えられがたい。その理由はアラビア語が難解のためである。ミスル銀行と工業化、ハルブの経済観を分析するためには主著『エジプトの経済的救済、エジプト人の銀行すなわち国民銀行の創立』（1911年刊）をはじめ、演説集のなかにある「ドイツの工業および貿易に関する報告」（1916年6月12日）、「ミスル銀行創立祝賀会において」（1920年5月8日）などの演説や幾多の重要資料の解説を必要とする。また、ハルブは熱烈なムスリムである。『女性の躰とヴェイル』（1899年刊）や『女性とヴェイルに関する結論』（1901年刊）をはじめ、カーシム・アミンとの論争を分析してみることも必要なのではないのか。ハルブの著作が読解され、分析されたとき、ミスル銀行史の研究はまた一步前進を遂げることになるだろう。

つぎに、ミスル銀行とその工業化の展開過程がハルブ個人の意志や選択によって遂行されたのではないとすれば、それがハルブおよびかれの意志を具体化する支持者層によって実施されたのか、それともハルブを強力に補佐する経済通の数人が存在したのか本書のなかでは不明である。フワード・スルタンは同行の専務理事であるが、本書に指摘されているような人物だったのであろうか。あるいは、同行が傘下に多数の企業を設立し、工業化を推進中、同行は1927年マハツラ・エル・クブラにミスル綿紡織会社を創立するが、同社の経営を長期間にわたって担当していたアブデル・ラフマン・ハンマーダの役割に関してもほとんど触れられていない。

さらに、タラアト・ハルブたちの構想していたミスル銀行の成立および同行による工業化、さらにその破綻を「ミスル・グループの創設、成長、衰退は19世紀および20世紀初頭にエジプトに課せられた構造的諸条件の結果と考えられる」（211ページ）とした氏の結論には評者も全く同意見である。その工業化の実現は1920、30年代の社会、経済構造の下では限界があったと考えられる。評者はミスル銀行による綿紡織業を主導産業とし、綿花の加工全体に及ぶ工業化ないし綿花関連事業が今日の立場から考察しても経済的合理性をもった、理に適った構想であると思うけれども、それがなぜ後発先進国ドイツや日

本のような経済発展を遂げえなかったのであろうか。結局、それは綿紡織業による資本蓄積に限界があり、その次に投資されるべき主導産業が準備されていなかったからではないのか。さらに、主要工業である綿紡織業だけに限定して論理を追跡してみると、根本的にはそのコストと収益力に問題があるのではないのか。たとえば、ミスル綿紡織会社の1930年代の利益を見てみると（136ページ）、国内市場向け製品を生産する輸入代替工業の性格を帯びていたためもあって、純利益は順調に伸張しているように見えても、その規模は小さい。また、筆者の指摘しているような下層階級用の粗布製造（203ページ）にはたして安価な原綿を使用していたという事実が存在するのであろうか。ここでいう「安価な綿花」とは外国産の短繊維綿花ではなくて、実は「アシユモニー種」や「ザゴラ種」などエジプト国内では相対的に短繊維と考えられている長繊維綿花のことではないのか。評者が文献上知るかぎり、外国産短繊維綿花を国内用の粗布製造に使用したのは19世紀末から20世紀初頭にかけてのアレキサンドリアの土着綿紡織業においてである。一般的に想定され得ることはミスル系綿紡織業に大地主が出資したのは、かれらの生産した原綿を企業が使用するという前提が存在したからではないのか。したがって、ミスル系綿紡織業は安価な労働力と高級な長繊維綿花を使用して輸入代替を達成した。高級原綿の投入は付加価値の高い高級製品の生産が要請される。それゆえ、ミスル系綿業に課せられた歴史的使命は、豊富かつ安価な労働力と廉価な原綿を組合わせて大量に低価格で良質な織布を輸出し世界市場を制覇した日本綿業のそれとは異なっている。輸入代替を果たしたミスル系紡織業は高級綿糸・織布の輸出段階に到達すると、エジプト綿を使用する西欧産織布と競合するため、輸出量の急激な伸張には限界がある。少なくとも、自国産原綿を使用しての綿布輸出には欧米と同一水準かそれを凌駕する品質の綿織布を欧米よりも相対的に低価格で輸出しないかぎり、ミスル系綿業に急速な発展を期待するのは困難なのではないか。結局、本書に指摘されているミスル銀行の破産は同行の投資拡大による1938、39年の流動性不足（201ページ）にあると指摘されているものの、本質的には、傘下諸工業の収益力に問題があったことになるであろう。

さらに、本書の最大の特徴ともなっている著者の基本的構想つまり「植民地主義」対「民族資本」の対抗関係のなかで、エジプト国内の「社会的諸勢力」の社会的、経済的葛藤を分析することによってミスル銀行史を理解

するという視角以外にはミスル銀行史を解明する構想はないのであろうか。評者は筆者の分析を卓抜なものだと考えるけれども、氏とは若干異なった構想も想定可能である。たとえば、それはミスル銀行とエジプトの工業化の問題を後進的な経済構造をもつこの国の急速な近代化構想とその挫折と把握し、その挫折の諸要因を窮極的には国内の生産諸要素の不備にあるとする視角である。より端的に言えば、「植民地主義」対「民族資本」の対抗関係を相対的に軽視し、国内の経済構造それ自体の後進性を問題としてとらえる構想も十分考えてよいのではないか。事実、氏の分析もこの対抗関係を露骨に強調することは全くなく、イデオロギー的な偏向と考えられる面は全然ない。筆者の筆致もミスル銀行およびその背後に存在する社会的勢力の実証に力点が注がれている。氏の分析視角とは別に、評者が異論を提出する理由は若干ある。イギリス側がエジプトの工業化を阻止したと推測されうる事態が発生したのはイギリス占領下であった。また、「植民地主義」対「民族資本」の対抗関係をあまり重視すると、1930年代に実施された外資との合弁事業を一種の「連続説」を提出して説明することになる。確かに「植民地主義」体制がエジプトを原料供給、製品輸入の植民地とし、その後もその状態を維持しようとし、工業化を目標とする「民族資本」の確立を阻止しようとしたことは想定されうるけれども、歴史的経過のなかでは体制側の「民族資本」弾圧策が貫徹しなかったことを示している。1930年代の外資との一連の合弁事業もベイダ染色会社1社においてのみ、外資が卓越している。さらに、エジプトが保護領を離脱して相当の年月を経過しても、その「工業化」が容易に進歩しないという事実を直視するとき、「工業化」の失敗を全部「植民地主義」にのみ転嫁することが必ずしも正鵠を得ているとは言えない側面もあるのではないのか。端的に言えば、「工業化」あるいは一層広範囲に考えて「近代化」に限界があるのは「工業化」ないし「近代化」を受容し育成する培養基つまりこの国の政治、経済、社会構造一般がそれらの受容過程において多大の軋轢を引起こして、「工業化」ないし「近代化」が急速に達成されなかったのではないのか。

このように見てくると、本書は「植民地主義に挑戦して——ミスル銀行とエジプトの工業化、1920～41年——」という題名であり、民族資本と工業化の研究のように思うけれども、若干発想を変えて見てみると、本書は「地主」の研究でもある。その意味で、本書はG・ペーアの

『近代エジプト地主制史論, 1800~1950年』を想起させるものである。投資における「地主」→「ミスル銀行」→「傘下諸工業」という経済発展の展開はとても後進国における発展とも思えないほど先進国型のそれに近い。にもかかわらず、その展開過程はエジプトを現在に至るまで中進工業国の水準にまで引上げなかった。本書はその経済発展の主体を担った「地主」の社会的、経済的背景について考察している。その点で上記のG・ペーアの著作から新しい展開が行なわれている。評者はミスル銀行とその工業化に関して一層具体性のある経済的データが挿入されていることを望みたかった。換言すれば、「同行の背後に存在する一層大規模な社会的勢力」の調

査のみならず、同行の普通預金額を始めとし、政府預金、定期預金、貸付金、証券投資、準備金などの変化、あるいは傘下諸企業の資本金、準備金、剰余金、さらに労働力、熟練労働力、賃金などが把握可能であるとすれば、1920~41年までの変化を経済的な視角からも分析できたのではなかったか。1920年代に登場してミスル銀行を成功に導いたハルブ周辺に活動する「地主」が1930年代に新しい商・工業階級と対立し、その後交替してゆく過程を経済的データによっても解明されたら、本書は読者に一層の知的興味を掻き立てたであろう。もちろん、それがなくても本書は見事なミスル銀行史になっている。

鈴木弘明（アジア経済研究所調査研究部）